

地域看護学専攻科閉校における修了生の統合的な学びとスキル修得の現状と課題 —1期生から9期生の質問紙調査報告—

藤原 恭子¹⁾・國本 政子¹⁾・福岡 悦子²⁾・金山 時恵^{2)*}・矢庭 さゆり²⁾

1) 元新見公立短期大学地域看護学専攻科 2) 新見公立大学看護学部

(2013年11月13日受理)

新見公立短期大学地域看護学専攻科閉校における統合的な学びとスキル修得の現状を把握するため、1期生から9期生を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、少人数の中でハードスケジュールをこなしつつも1年間の教育内容に充実感を感じていた等修了生の学びや思いを明らかにした。

(キーワード) 専攻科修了生, 学び, 重要なスキル

はじめに

2004年4月、新見公立短期大学地域看護学専攻科（以下、専攻科）は1年間の保健師養成課程として開学し、2013年3月、第9期生を最後に発展的な閉校となった。2010年4月からは、新見公立大学となり保健師教育は継続されている。

専攻科は9年間で142人の修了生を輩出し、それぞれの地域において活躍をしている。142人の専攻科修了生が少しでもつながり、同窓生としての意識を持ってほしいと考えた。また、1学年は15から16人という少人数であるため、きめ細かい講義・演習・実習・グループワーク等に取り組んできたが、地域での活動では専攻科での学びがどのような効果を得られているのか等を明らかにするためアンケート調査を実施したので報告する。

I. 調査目的

専攻科での統合的な学びとその役立ちを調査し、大学教育における保健師教育の資料とする。

II. 調査方法

1. 調査対象

専攻科修了生1期生から8期生126人のうち住所が判明している114人と9期生16人の合わせて130人

2. 調査方法

無記名自己記入式質問紙調査。専攻科修了生に調査の目的、方法、倫理的配慮について文書にて説明し実施した。

3. 調査期間

2012年11月10日～12月10日

4. 調査内容

基本属性、就労状況、専攻科在学中の状況：在学中の充実感、学びの深まりの程度、実習期間の程度、家庭訪問、疫学調査、学校保健室等における学び、保健師として活動する際の重要なスキル等

5. 分析方法

統計処理ソフト SPSS 16.0 J for Windows を用いて単純集計、クロス集計を行った。また、自由記述については意味内容の類似したものをまとめた。

6. 倫理的配慮

調査の主旨、調査結果は本調査の目的以外では使用しないこと、調査への協力は自由意思によるもの、個人評価や成績評価とは無関係であること、調査に協力しないことで不利益を被ることがないことを文書で説明し協力を求めた。返信をもって同意が得られたものとした。

III. 地域看護学専攻科教育目的、目標について

1. 教育目的：地域の人々が自らの健康を守り向上することができるように支援する能力を養うため、専門的知識・技術及び態度を学ばせ、地域看護の役割を果たすことができる人材を育成する。

2. 教育目標

1) 地域の健康問題を生活の場で把握し、適切な地域看護活動を展開する基礎的能力を養う。

2) 地域住民の健康問題を組織的に解決する意義・必要性が理解でき、地域・職場・学校など集団間における連携や保健医療福祉の連携におけるコーディネート能力を養

*連絡先：金山時恵 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

う。

3) 地域住民が自らの健康問題の解決のため社会資源の活用ができるよう支援する能力を養う。

4) 地域看護の発展・向上のため、自ら研鑽するための研究的態度を養う。

IV. 結果

調査配布数 130 部、回収数 69 部 (回収率 53.1%)、有効回答数 69 部 (有効回答率 53.1%) であった。

1. 基本属性

性別は男性 2 名 (2.9%)、女性 67 名 (97.1%) であった。年齢は 21 歳から 47 歳であった。居住地は岡山県が 13 名、兵庫県 10 名、その他 19 都道府県からの回答があった。

就労状況は、就労有りは 50 名 (72.5%)、就労無しは 3 名 (4.3%) であり、その理由では現在子育て中や育児休暇取得中のためであった。その他学生 16 名 (23.2%) は在学中であった。勤務年数は、1 年目 12 名 (17.4%) が最も多く、次いで 4 年目と 5 年目が各々 9 名 (13.0%) であった。職種は保健師 34 名 (49.3%)、看護師 14 名 (20.3%)、養護教諭 2 名 (2.9%) であった。勤務場所は、行政機関 27 名 (39.1%)、産業 4 名 (5.8%)、病院 4 名 (5.8%)、その他 1 名 (30.0%) であった。

2. 在学中の学びの状況

1) 在学中の充実度

「充実していた」39 名 (56.5%)、「苦しかった」19 名 (27.5%)、「楽しかった」8 名 (11.6%) その他 3 名 (4.3%) であった。

2) 在学中における学びの深まりの程度 (複数回答)

保健所・市町村実習が 58 名と最も多く、次いで家庭訪問 55 名、公衆衛生看護研究 46 名、学校保健 33 名、疫学調査 29 名、産業保健 27 名であった (図 1)。

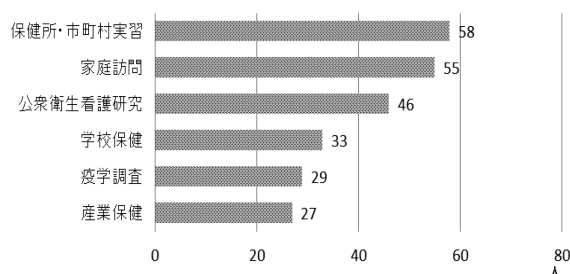


図 1 学びの深まりの程度 (複数回答)

3) 保健所・市町村実習期間と学び

3 週間という実習期間は 56 名 (81.2%) が適当と答えて

いた。長すぎた、短すぎたは各々 6 名 (8.7%) であった。

保健所・市町村実習を通しての学びの深まりが大きいと答えた者は 67 名 (97.1%) であった。

保健所・市町村実習の学びの理由として、社会勉強になった 25 名 (36.8%)、目標となる保健師に出会えた 16 名 (23.5%)、業務の面白さが分かった 16 名 (23.5%) であった。

4) 家庭訪問での学び

家庭訪問を通しての学びの深まりが大きいと答えた者は 67 名 (97.1%) であった。

家庭訪問における学びの理由として、妊婦・出産・育児の実際を見ることができた 16 名 (22.9%)、在宅高齢者の喜びや苦しみ等を知ることができた 15 名 (21.4%)、家庭の温かさや絆を知ることができた 5 名 (7.1%) であった。

5) 疫学調査での学び

疫学調査を通しての学びの深まりが大きいと答えた者は 55 名 (79.7%) であった。

疫学調査における学びの理由として、アンケート調査の難しさを学んだ 37 名 (52.9%)、住民と直接話をしたり意見を聴くことができた 13 名 (18.6%)、調査から住民の健康に関する意識度が理解できた 11 名 (15.7%) であった。

6) 学校保健室実習での学び

学校保健室実習を通しての学びの深まりが大きいと答えた者は 64 名 (92.8%) であった。

学校保健室実習における学びの理由として、学校の中での養護教諭の置かれている位置や役割が理解できた 55 名 (78.6%)、子どもたちの持つ悩みが理解できた 5 名 (7.1%) であった。

7) 産業保健室実習での学び

産業保健室実習を通しての学びの深まりが大きいと答えた者は 59 名 (85.5%) であった。

産業保健室実習における学びの理由として、保健師活動の重要性が理解できた 31 名 (44.3%)、職場の中で労働者の置かれている状況が少し理解できた 25 名 (35.7%)、職域には心身に危険の及ぶ業務があることが分かった 10 名 (14.3%) であった。

8) 公衆衛生看護研究での学び

公衆衛生看護研究を通しての学びの深まりが大きいと答えた者は 63 名 (91.3%) であった。

公衆衛生看護研究における学びの理由として、完成したときの達成度が大きかった 33 名 (47.1%)、多くの文献を読み研究することの大切さが理解できた 21 名 (30.0%)、友人同士で議論し友情が深まった 8 名 (11.4%) であった。

9) 専攻科での学びが現在の仕事に役立っているか(複数回答)では、「自分の人生にとって宝である」30名、次いで「専門的な知識と技術が生涯役立つ」28名、「生涯続く友人を得た」24名、「教員との深い絆ができた」10名であった。

保健師として活動するとき最も重要なスキル(複数回答)では、コミュニケーション能力が45名と最も多く、次いで人間性(思いやり、笑顔、素直な心)が17名、専門的知識14名、行動力11名、傾聴10名であった(図2)。

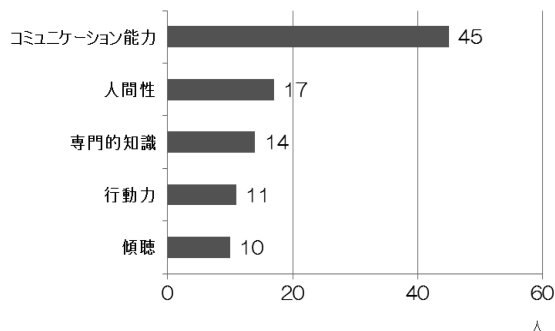


図2 保健師として最も重要なスキル（複数回答）

辞めたいと思ったことがあった者は20名(29.0%)、ないと思った者は47名(68.1%)、その他2名(2.9%)であった。辞めたいと思った時に、相談した者は友人が12名と多く、次いで父母7名であった。

教員のアドバイスで心に残ったことがあると答えた者は40名(58.0%)、ないと答えた者が21名(30.4%)であった。

V. 考察

1. 講義・演習に関する内容

1年間の在学中は充実していたとする者が6割を超えているが、講義と実習、研究、就職活動、国家試験対策とハードスケジュールで充実していたが苦しい日々もあったことがうかがえる。実習での学びについて、保健所・市町村実習、家庭訪問、看護研究、学校保健、疫学調査、産業保健の順で学びが大きい。保健所・市町村実習では、あらゆる年齢のあらゆる健康レベルにある住民と接し、生活環境、健康度の異なる対象者に対して、知識をフルに活用して予防につながる健康教育や保健指導等を実践できた充実感から多くの学びを得ることができたものと思われる。家庭訪問実習は看護師免許取得の上での母子保健、高齢者保健の知識と実践活動の場であり、学びが広く深いものであったと考える。

2. 実習及び研究に関する内容

実習期間においては8割以上の者が適当であったと答

え、実習から学ぶことの多さに充実感を感じたと思われる。目標となる保健師に出会えた、業務の面白さが分かったなど社会に足を踏み入れる心構えもできたものと考ええる。

さらに、家庭訪問実習では在宅高齢者や妊娠・出産・育児の過程にある母子を対象とし、直接家庭に訪問することにより、学生の知っている家庭とは異なる人々の生活の営みを見聞し、空気に触れ、社会の一番小さな単位としての家族のありように深い感銘を受けたものと考ええる。

疫学調査での学びでは、アンケート調査の難しさを実感している。対面しての聴きとり調査では、初対面の人々にどれだけ信頼されて本音で答えてもらえるのかに心を砕いたようである。

学校保健室実習では9割の者は学びが大きかったと答えている。教育という場で、子どもの心と身体についてサポートしている養護教諭の業務の特性や役割の理解ができています。

産業保健室実習では8割の者が学びをあげ、産業現場の特性から、保健師活動の困難性や労働者のおかれている状況などが垣間見え、産業保健活動の重要性も理解できている。

看護研究の学びでは9割の者は学びが大きいと答え、研究の大切さが理解できている。試行錯誤の上、完成したときの達成感が忘れられない等と答えている。指導する教員の支えられながら、脱落しそうになりながら取り組んだ姿勢が伺われる。

1年間密度の濃い講義、実習の繰り返して時間的余裕は少なく、常に講義と実習、就職試験、国家試験対策で超多忙であり、これらが心に最も残ると答えている。また友人との語らい、励ましあい等友人同士の支えあいがあったからこそ充実感や達成感を味わっているものと思われる。

3. 学修成果に関する内容

本専攻科での学びから、人生の宝になった、専門的知識と技術を手に入れた、生涯に通じる友人を得た等、人と知識と技術を手に入れ自信につながったものと考ええる。

保健師活動において重要なスキルとして、対人支援の専門職としてコミュニケーション能力が最も重要である。その他思いやり、素直な心、笑顔等保健師としての人間性も重要といえる。

4. 保健師教育課程への示唆

看護師免許を取得後進学してきた学生、看護師免許取得後現場で臨床経験をj得て進学してきた学生等、様々な背景をもっている。地域看護学に興味・関心を持つ学生たちが少人数の中でハードスケジュールをこなし、充実した1年間を過ごした様子が伺える。少人数であるがゆ

えに学生間のつながりも強く、切磋琢磨してお互いを助け合いながらの貴重な日々であったことも伺える。また、専門職業人としてのプライドを持ち専門職を生かしながら、7割以上が就労していることも1年間を熱い思いで学生とともに歩んできた教員の思いが通じていることが感じられる。「学びたい学生」と「学ばせたい教員」の熱い思いが濃密な時間を共有し、専門職として知識を最大限に活かし現在に至っているものと考え。今後もこの思いを大切にしながら大学教育の中での保健師教育の中核として継続し続けてほしいと強く願う。

新見公立大学看護学科の教育理念は、豊かな教養と高い倫理性を養いながら、多面的な人間理解と専門的な基礎的知識・技術を身につけ、科学的思考に基づく判断力や創造力のある看護専門職として、地域および国際社会に有意な人材を育成することである。この理念に基づき、今後も人間力と看護力を併せ持つ人材育成に力を注ぎ続けられることを願っている。

文献

- 1) 在宅高齢者を対象としたミニサテライト・デ이의課題と展望, 新見公立大学紀要 33, 151-154, 2012.
- 2) 「地域福祉学科卒業生の集い」の現状と課題, 新見公立大学紀要 33, 177-179, 2012.